

---

# 青年期女性の性的経験と父親に対する 接触回避との関連

羽成隆司

河野和明

伊藤君男

梶川菜々

## 要約

本研究は、青年期女性の性的経験と父親に対する接触回避との関連について分析することが主たる目的であった。質問紙調査では、女子大学生を対象に、これまでの恋愛経験、性交経験のそれぞれの有無とその対象となった男性の数、父親に対する接触回避得点、2種類のポジティブ感情（尊敬・愛情）と2種類のネガティブ感情（軽蔑・嫌悪）、回答者の性的指向を測定した。性交経験がある回答者の方がいない回答者よりも接触回避得点が有意に小さかった。性交経験の対象人数、恋愛経験の有無とその対象人数、および性的指向には、接触回避得点との明確な関連は見られなかった。接触回避得点はポジティブ感情とは負の相関、ネガティブ感情とは正の相関が有意に認められた。父親に対する接触回避に関与する要因について検討された。

キーワード：接触回避、性的経験、性的指向

---

## はじめに

本研究は、青年期女性における父親への接触回避の特徴について、女性のこれまでの性的な経験や性的指向との関連から分析することを目的とする。

幼少期における親子間での身体接触は、愛着の形成や正常な発達にとって重要であり、通常は頻繁に行われる。もしこの身体接触が不十分であれば、心身や言語の発達遅滞や情緒不安定などの重大な障害が発生する可能性が高いことがよく知られている（Bowlby, 1973; Harlow & Mears, 1979）。しかし、幼少期を過ぎると親子間での身体接触の量は減少していき、思春期以降でこの減少は明確となる（関連の概説は、Morris [1971], Richmond & McCroskey [2004], 曹・釘原 [2018] など）。一般的に、思春期から青年期頃においては、女子

の方が男子よりもその特徴が明瞭であり、また、この時期の女子は、母親よりも父親に対する接触への抵抗が大きいように思われる（羽成・河野・伊藤・角田, 2014）。

Kawano, Hanari, & Ito (2011) をはじめ、筆者の研究グループによる研究では、接触回避や嫌悪感の適応的意義について検討するため、青年期男女を調査対象として、様々な人物（肉親、友人、恋愛対象者、嫌いな知人等）への対人感情や、彼らに対する接触回避の特徴を調べているが、身体接触において、女性は男性に対してより回避的（女性に対してより受容的）な傾向が一貫して得られている（羽成・河野・伊藤, 2009a, 2009b, 2011; 伊藤・河野・羽成, 2009; 河野・羽成・伊藤, 2012, 2015; 羽成ら, 2014）。たとえば、肉親、友人、嫌いな知人を対象とした場合、それらに対する接触回避得点は、母親、姉妹、女性友人、嫌いな知人女性よりも、父親、兄弟、男性友人、嫌いな知人男性に対してそれぞれ値が大きかった。

一方、男性にはこのような対象人物の性差がほとんど見られなかった。恋愛対象者（上記研究では恋愛対象が異性に限定されている）の場合には、女性の方が男性よりも恋愛対象者への接触回避得点が大きく、また、それは女性友人への接触回避得点よりも大きいほどであった。

上記の結果から、青年期の女性の接触回避は、男性に対する潜在的な性的防衛を反映している可能性が推測される。妊娠、出産、子育て等、配偶にかかわるコストが男性よりはるかに大きい女性は、性的防衛の必要性が男性よりも高い。そのため、たとえ恋愛対象者であっても完全には警戒を解かないで一定の接触回避を保つことにより、男性への一貫した接触回避が現れるのかもしれないと解釈できる。また、男性であっても肉親である父親や兄弟は、通常は最も親密で信頼できる対象であり、回避する必要性は一見ないように思われるが、肉親であるがゆえに性的な関係を避ける必要性があり、その結果、接触回避が高くなると考えることもできる。すなわち、肉親のように幼少期に親密な関係にあった人物に対しては性的魅力を感じなくなるというウェスターマーク効果（Westermarck, 1921）のような感情レベルでの性的回避以外に、日常生活の中で肉親に対する接触回避がインセスト回避に寄与する機能を持つ可能性もある。インセスト回避の至近的な動因は、幼少期に親密な関係にあった者に対する性的嫌悪であると考えられているが（Lieberman & Hatfield, 2006）、この性的嫌悪が肉親に対する接触回避に反映されているのかもしれない。

上記の可能性を検討するためには、青年期女性の肉親に対する接触回避について、様々な要因との関係を探索的に分析していく必要がある。本研究は探索的な試みの一つとして、女子大学生を対象にして、父親に対する接触回避と性的経験との関連に着目して質問紙調査を行った。肉親に対する接触回避がインセスト回避という性的防衛として機能しているとしたら、性的経験に慎重な態

度ととりがちな女性（性的防衛の傾向が強い女性）とそうでない女性とでは、父親に対する接触回避の程度においても差異が見られるかもしれないからである。

調査では、回答者の恋愛経験・性交経験のそれぞれの有無とその対象となった男性の数、父親に対する接触回避の程度、2種類のポジティブ感情（尊敬・愛情）と2種類のネガティブ感情（軽蔑・嫌悪）、および回答者の性的指向を測定した。そして、恋愛経験、性交経験、性的指向によって、父親に対する接触回避や感情がどのように異なるかを検討した。

---

## 方 法

---

### 調査対象

東海地方の女子大学生313名を調査対象とし、質問紙への回答を求めた。このうち、回答の拒否や回答に多くの欠損値があったものを除外し、308名を分析の対象にした。平均年齢は、19.3歳（標準偏差0.81）であった。

### 質問紙

質問項目は以下の内容で構成されていた。

【恋愛経験・性交経験】これまで回答者自身が恋愛感情を持った男性の有無を尋ね、「ある」と答えた場合には、中学時代、高校時代、大学時代ごとに、その男性のイニシャルをすべて回答するように求めた。性交経験においても同様の方法で回答を求めた。

【父親への接触回避・対人感情】接触回避の程度は、Kawano, et al. (2011) ほかで使用してきた接触回避尺度を用いて測定した。この尺度は、対象とする人物（本調査の場合は父親）と、1) じかに箸を入れて同じ鍋料理を食べる、2) 握手する、3) 小さなテーブルで向かい合って話をする、4) その人が長時間座ったイスに座る、5) その人が

ずっと使っていたコップで飲み物を飲む、6) 人工呼吸で自分の口からその人の口に息を吹き込む、7) その人が入った後のお風呂に入る、8) その人が使った後の洋式トイレに入って大用を足す、の8項目について、「まったく平気」から「非常にしたくない」までの7段階で評価するものであった。各項目の評価の合計点を接触回避得点とした。対人感情については、2種類のポジティブ感情（尊敬・愛情）と2種類のネガティブ感情（軽蔑・嫌悪）について7段階で測定した。

【性的指向】回答者自身が自覚する性的指向（自身が性的魅力を感じる対象の性）について、異性愛者、同性愛者、両性愛者、無性愛者、わからない、のいずれかの選択を求めた。

## 手続き

大学の授業時間を利用して質問紙調査を集団実施した。回答に先立つ説明の中では、参加者にはすべてについて率直に回答することを求めたが、倫理的配慮として、質問紙の概要、および、回答が任意である旨の説明を詳しく行った。具体的には、性的経験に対する印象を問う項目があること、回答すること自体が不快感を喚起する可能性があること、回答はあくまで任意であり、途中で中止も可能であることを強調した。これらは質問紙の表紙にも記述されていた。参加者の匿名性を確保するために事前の署名は求めなかった。調査実施の翌週の授業時に、デブリーフィングを行った。本研究計画は、相山女学園大学文化情報学部の研究倫理委員会にて審査を受け、許可を受けた。

## 結 果

### 性的指向の割合

性的指向をどのように自身が認識しているのかについては、異性愛者85.4%、両性愛者4.9%、「わからない」8.8%であった。本調査では、同性愛

者と無性愛者という回答はほとんど見られなかった（同性愛者1名、無性愛者2名）。一方、「わからない」という回答が1割弱あったので、同性愛者または無性愛者であることを明確に自覚している回答者でも、「わからない」を選択していた可能性もある。

### 恋愛経験、性交経験

今までで恋愛感情を持った男性がいた（恋愛経験あり）という回答が、全体のうち85.0%、男性との性交経験があるという回答が28.7%であった。恋愛経験、性交経験いずれもあるという回答は28.7%（性交経験があるとした回答者はすべて恋愛経験者であった）、恋愛経験のみあるという回答は56.3%、性交経験のみあるという回答は0%、恋愛経験、性交経験いずれもなしという回答は15.0%であった。ほとんど回答者がいなかった同性愛者と無性愛者を除いた性的指向別の各経験の割合を表1に示した。 $\chi^2$ 検定の結果、性的指向の違いによる恋愛経験の割合に有意差は認められなかったが、性交経験については、有意差が認められ（ $p<.01$ ）、「わからない」という回答者では性交経験率が低かった。

恋愛経験、性交経験があったとした回答者で、それぞれの対象者として記入されたイニシャルの合計数を、恋愛経験と性交経験の対象人数とした。恋愛経験の対象人数の平均は3.44人（標準偏差2.81）、性交経験の対象人数の平均は2.23人（標準偏差1.76）であった（性交経験の合計人数が10人以上の回答が2件あったが、これらを除いて算出した）。恋愛経験の対象人数と性交経験の対象人数についてPearsonの相関分析を行ったところ、正の相関が有意であった（ $r=.355$ ,  $p<.01$ ,  $n=72$ ）。

また、恋愛経験があったとした回答者について、中学時代、高校時代、大学時代のどこから男性のイニシャルが記載され始めたかを確認し、恋愛経験の開始時期を推測した。恋愛経験がない者を含

表1 性的指向別の恋愛経験、性交経験の割合

	異性愛者	両性愛者	わからない
恋愛経験あり	86.4%	86.7%	78.3%
性交経験あり	30.5%	46.7%	4.3%

表2 恋愛・性交経験と父親に対する接触回避得点平均値（ ）内は標準偏差

恋愛経験あり	恋愛経験なし	性交経験あり	性交経験なし
21.34 (12.15)	22.47 (11.56)	18.45 (11.32)	22.74 (12.14)

表3 各性的指向における父親に対する接触回避得点平均値（ ）内は標準偏差

異性愛者	両性愛者	わからない
21.62 (11.96)	19.53 (14.18)	21.83 (12.24)

めた全体の中で、中学時代またはそれ以前に恋愛経験を開始したと思われる者は71.3%、高校時代が9.8%、大学時代が3.9%であった。性交経験の開始時期も同様にして推測した。性交経験がない者を含めた全体の中で、中学時代またはそれ以前に性交経験を開始したと思われる者は3.1%、高校時代が11.4%、大学時代が14.2%であった。

### 接触回避得点と恋愛・性交経験、および、性的指向の関係

父親に対する接触回避得点の平均は、21.51（標準偏差12.05）であった。これは伊藤ら（2009）と同程度の数値であった。恋愛、性交経験の有無ごとの父親に対する接触回避得点を表2に示した。恋愛経験の有無による父親に対する接触回避得点の差をt検定によって検討したところ、両者に有意な差は見られなかった（ $t[252] = -.54$ 、 $p > .10$ ）。一方、性交経験の有無による父親に対する接触回避得点の差については有意であり（ $t[252] = -2.60$ 、 $p < .05$ ）、経験ありの者の方が接触回避の程度が小さかった。

恋愛対象者数と接触回避得点についてPearsonの相関分析を行ったところ、有意な相関は認められなかった（ $r = .096$ 、 $p > .10$ 、 $n = 254$ ）。性交対

象者数と接触回避得点については、全回答者を対象にした場合には有意な相関は認められなかったが（ $r = -.059$ 、 $p > .10$ 、 $n = 254$ ）、性交経験がある回答者に限定した場合は、正の相関が有意傾向であった（ $r = .205$ 、 $p < .10$ 、 $n = 72$ ）。

同性愛者と無性愛者を除いた各性的指向における父親に対する接触回避得点を表3に示した。分散分析を行ったところ、性的指向の違いによる有意な差は見られなかった。

### 対人感情と性的指向、接触回避得点、および、恋愛・性交経験の関係

父親への対人感情の評定平均値は、尊敬4.54（標準偏差1.93）、愛情4.51（標準偏差1.88）、軽蔑2.78（標準偏差1.92）、嫌悪2.82（標準偏差1.94）であった。

表4に、3つの性的指向における対人感情の評定平均値を示した。両性愛者のポジティブ感情が低め、ネガティブ感情が高めの値で対人感情全体の肯定的評価が低いように見えるが、分散分析を行ったところ、尊敬で有意傾向（ $F(2, 248) = 2.54$ 、 $p < .10$ ）が見られたのみであり、性的指向による父親への対人感情に明確な差異は認められなかった。



表4 各性的指向における父親への対人感情の評定平均値 ( ) 内は標準偏差

	異性愛者	両性愛者	わからない
尊敬	4.62 (1.90)	3.47 (2.17)	4.52 (1.90)
愛情	4.49 (1.87)	4.20 (2.27)	4.87 (1.71)
軽蔑	2.77 (1.92)	3.53 (2.23)	2.35 (1.72)
嫌悪	2.81 (1.94)	3.53 (2.23)	2.57 (1.78)

表5 父親に対する接触回避得点および父親への4つの対人感情間の相関

	尊敬	愛情	軽蔑	嫌悪
接触回避得点	-.477**	-.546**	.512**	.569**
尊敬		.751**	-.646**	-.609**
愛情			.751**	-.604**
軽蔑				-.634**
嫌悪				

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$ 

表6 恋愛・性交経験と父親への対人感情評定平均値 ( ) 内は標準偏差

	恋愛経験あり	恋愛経験なし	性交経験あり	性交経験なし
尊敬	4.60 (1.90)	4.26 (2.05)	4.42 (1.99)	4.60 (1.90)
愛情	4.55 (1.90)	4.34 (1.74)	4.66 (1.93)	4.46 (1.85)
軽蔑	2.76 (1.92)	2.87 (1.95)	2.68 (1.88)	2.82 (1.94)
嫌悪	2.83 (1.95)	2.79 (1.89)	2.67 (1.83)	2.88 (1.98)

尊敬、愛情、軽蔑、嫌悪、および、接触回避得点についてPearsonの相関分析を行ったところ、接触回避得点は、尊敬、愛情のポジティブな感情と負の相関が、軽蔑、嫌悪のネガティブな感情とは正の相関が有意に認められた。また、ポジティブ感情間、ネガティブ感情間には正の相関、ポジティブ感情とネガティブ感情間には負の相関が有意であった(表5)。感情面で父親に対して肯定的な評価をしている回答者ほど接触回避の程度が低いことが明らかであろう。

表6に、恋愛、性交経験の有無ごとの父親への対人感情の評定平均値を示した。恋愛経験、性交経験の有無による対人感情について $t$ 検定を行ったが、いずれの感情においても有意な差は見られなかった。

## 考 察

父親に対する接触回避と回答者である青年期女性のこれまでの性的な経験との関連について分析したところ、性交経験がある回答者の方が回答者よりも接触回避得点が小さかったこと、性交経験がある回答者に限定した場合、性交経験の対象人数と接触回避得点の間の正の相関が有意傾向となったこと、恋愛経験の有無とその対象人数、および性的指向と接触回避得点との関連はなかったこと等の結果が見いだされた。

父親に対する接触回避が性的防衛の一部を反映するものであるとしたら、恋愛や性交に慎重で、それらの経験が少ない女性の方がそうでない女性より接触回避の程度が大きくなる可能性がある

が、これに合致した結果は、性交経験の有無による差異のみであった。また、性交経験の対象人数と接触回避得点には有意傾向ながら正の相関が見られたことはこの可能性と逆の結果と言える。

このように、青年期女性の性的経験や性的指向と父親への接触回避との間に明確な関連は見いだせなかったが、性交経験がある回答者の方が接触回避が小さいという特徴的な結果が得られた。父親に対する感情に性交経験の有無によって差がないことから、この接触回避の差が父親との関係の良好さの程度に起因するものとは考えにくい。女性に潜在する一貫した性的防衛の個人差というより、性交経験そのものが、父親を含めて男性への接触回避を低下させる要因になり得るのかもしれない。この点を明確にするには、さらに性的な関係の期間や質に踏み込んだ測定が必要になるとともに、父親以外の男性を対象にして、同様の調査・分析を行ってみる必要がある。

接触回避得点は父親に対するポジティブな対人感情と負の相関、ネガティブな対人感情とは正の相関が有意に認められた。このことから、接触回避の程度には対人感情も影響することは明らかであるように思われる。そもそも、思春期から青年期という発達段階においては、女性に限らず男性も父親をネガティブに評価してしまうことは珍しくない。大学生を対象にして肉親への対人感情を調べた研究では、父親への評価が一番低かった(羽成ら, 2009b)。その要因として、理想の男性モデル(女性にとっては理想的な配偶者候補、男性にとっては理想的な成年・壮年期の男性イメージ)との不一致、中年男性に伴う不潔なイメージ、世代の違いによる価値観の不一致、父親が自身の自立を妨げる存在になり得ること等が挙げられる。さらに、両親の関係の良好さについての認知が父親への嫌悪に影響する可能性も指摘されている(阿部, 2016)。父親への接触回避には、このような認知・感情・発達段階による影響も関係し得るので、これらの変数を導入した検討も今後の課題

となろう。

性的指向の違いについては、接触回避においても対人感情においてもとくに差異は見られなかった。ここでは、同性のみを性的対象とする明確な同性愛者は例数が少なく分析の対象とならなかったため、異性愛者、両性愛者、不明(「わからない」)の3カテゴリーの差異のみを検討した。性的指向性に関する問題は一般に青年期以降で顕在化してくることが多く、早期から安定しているとは限らない(Rosario, Schrimshaw, & Braun, 2006; Berona, Stepp, Hipwell, & Keenan, 2018)。したがって、本研究の回答者が自覚する性的指向性もともと不安定であった可能性もある。とはいえ、今回の結果の範囲では、性的指向性という自己の性的対象に関する一種の性戦略は、父親に対する接触回避に影響しないと言える。自己の性的指向がどうあれ、配偶関係を持つことが不適応的な異性に対して女性は常に接触回避を高く保つ必要があるとすれば、この結果は合理的であると思われる。

しかし一方で、より強い性的指向の違いは性的防衛のあり方に差異をもたらす可能性を含んでいる。たとえば、本研究ではサンプルが充分に得られず分析できなかった同性愛者は、男性に性的魅力を感じず男性を配偶者候補にしないことが男性に対する接触回避の高さに反映されるのかもしれないし、逆に、男性に性的魅力を感じない(興味がない)ことが男性に対する性的な警戒を弱めてしまう結果、接触回避は低下するかもしれない。これまでの我々の接触回避研究では性的指向の違いについて考慮してこなかったが、今後は性的指向によって回答者を分類した分析を行うことが望ましいと思われる。

本研究は、青年期女性における父親への接触回避に、女性の性的経験の一部が関連することを示した。しかし、父親への接触回避に、性的防衛のような生物学的な要因と感情・認知・発達の要因がそれぞれどのように関与するのか、その詳細は明らかではない。今後は、女性の年齢範囲の拡大、

父親以外の中年男性の想定、性的指向の違いによる比較等を取り入れた調査計画によって、さらにデータ収集と分析を試みたい。

## 引用文献

- 阿部洋子 (2016) 父親に対する娘の嫌悪感 跡見学園女子大学コミュニケーション文化, 第10号, 1-10.
- Berona, J., Stepp, S. D., Hipwell, A. E., & Keenan, K. E. (2018) Trajectories of sexual orientation from adolescence to young adulthood: results from a community-based urban sample of girls. *Journal of Adolescent Health*, 63, 57-61.
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and loss (Vol. 2) Separation: Anxiety and anger*, London: Hogarth.
- 曹美庚・釘原直樹 (2018) 発達段階における親子間の身体接触に関する研究: 日韓の幼稚園児と小・中学生の両親からの報告を中心に 対人社会心理学研究, 18, 103-111.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2009a) 対人認知における嫌悪感情の分析 —配偶者選好の視点から— 相山女学園大学文化情報学部紀要, 第9巻第1号, 59-66.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2009b) 父母やきょうだいに対する嫌悪感インセスト回避の表れか? 相山女学園大学文化情報学部紀要, 第9巻第2号, 45-53.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男 (2011) 配偶者選択の点から見た身体に対する接触回避の適応的意義. 相山女学園大学文化情報学部紀要第11巻, 91-98.
- 羽成隆司・河野和明・伊藤君男・角田千夏 (2014) 青年期の女性の父親に対する回避傾向. 相山女学園大学文化情報学部紀要第14巻, 93-100.
- Harlow, H. F., & Mears, C. (1979) *The human model: Primate perspectives*. New York: Wiley.
- 伊藤君男・河野和明・羽成隆司 (2009) 父母およびきょうだいに対する接触忌避. 第2回日本人間行動進化学会大会 (九州大学)
- Kawano, K., Hanari, T. & Ito, K. (2011) Contact avoidance toward people with stigmatized attributes: Mate choice. *Psychological Reports*, 109, 639-648.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2012) 「接触回避尺度」開発の試み. 東海学園大学紀要第18巻, 155-161.
- 河野和明・羽成隆司・伊藤君男 (2015) 恋愛対象者に対する接触回避. パーソナリティ研究, 24, 95-101.
- Lieberman, D. & Hatfield, E. (2006) Passionate love, sexual desire, and mate selection: Evolutionary and cross-cultural perspectives. In Patricia Noller and Judy Feeney (Eds.) *Frontiers of Social Psychology: Close Relationships*. Psychology Press.
- Morris, D. (1971) *Intimate behavior*. Jonathan Cape, London.
- (モリス, D. 石川弘義 (訳) (1993) ふれあい —愛のコミュニケーション— 平凡社ライブラリー)
- Richmond, V. P., & McCroskey, J. C. (2004). *Nonverbal Behavior in Interpersonal Relations 5th ed.* Pearson Education, Inc. (リッチモンド, V. P., マクロスキー, J. C. 山下耕二 (編訳) (2006) 非言語行動の心理学 —

対人関係とコミュニケーション理解のために— 北大路書房)

Rosario, M., Schrimshaw, E. W., Hunter, J., & Braun, L. (2006) Sexual identity development among lesbian, gay, and bisexual youths: Consistency and change over time, *The Journal of Sex Research*, 43, 46-58.

Westermarck, E. A. (1921) *The history of human marriage, 5th eds.* London: Macmillan.

はなり・たかし / 文化情報学部教授

E-mail hanari@sugiyama-u.ac.jp

かわの・かずあき / 東海学園大学心理学部教授

いとう・きみお / 東海学園大学心理学部教授

かじかわ・なな / 文化情報学部